

未来が見えない私たち

田村 由布子

## ○登場人物

鈴沢 茉莉<sup>まつり</sup>（27） アパレルショップ店員。

まつり（17） 高校時代の鈴沢茉莉。美術部。

酒井翔太（27） 17） 茉莉の高校時代の恋人。

鈴沢 明子（48） 58） 茉莉の母親。

鈴沢 理奈（32） 茉莉の兄の妻。

野田 夏美（35） 茉莉が働くショップの店長。

工藤 真由（17） 茉莉の高校の同級生。美術部。

倉田 京香（17） 茉莉の高校の同級生。美術部。

○あらすじ

服飾系の専門学校を志望し、デザイナーになっていつかパリのランウェイに自分が作った服が登場することを夢見ていた幼い日の茉莉。しかし、専門学校への進学を反対され、短大に進むことに。その後、アパレルのグループ企業に就職が叶うも、デザイナーとしてではなくショップ店員として採用される。いつかはデザインの部署に移れる日がくると期待しながら仕事に取り組むが、異動願いは何度出しても通らない。気付けばデザインからも製作からも離れ、ひたすら店の在庫を捌く日々。

そんなモヤモヤのなか、久しぶりに高校時代の恋人と再開を果たす。彼には遠距離の恋人がいることを知りながらも、関係を始めてしまう茉莉。どうしようもない苦しさで行き詰まった人生を慰め、紛らわしてなんとか日々をやり過ごすことしかできない惨めさと虚しさに見舞われる毎日。

そんな茉莉のそばには、高校時代の「まつり」が時折姿を見せる。2人の会話はない。ただ、セーラー服を着たまつりは、何か言いたげに27歳の茉莉をじっと見つめるだけ。まつりは当てつけのように、茉莉の前で服のデザインと製作を続ける。茉莉とまつりの前に、いつの日かランウェイは開けるのか。

① 茉莉の部屋(夜)

仕事帰りの鈴沢茉莉(まつり)(27)、帰宅。

茉莉、部屋の電気のスイッチを点ける。パチっという音。

明転。

散らかった一人暮らしの部屋。畳まれていない洗濯物が足元や椅子に散らばっている。

セーラー服姿のまつり(17)、小さいダイニングテーブルの上で布を縫い合わせている。

茉莉、まつりの姿を一瞥。すぐに荷物を足下に置いてまつりの向かいの席に座り込む。

まつり、帰ってきた茉莉を気にせず製作に没頭している。

茉莉・語り「その日もいつも通りでした。私が仕事から帰ってくると、この子はいつもこんなふうにか何か作ってるんです。初めはびっくりしました。まさか……。見ない方が良くのかなとも思ったりしたんですけど、まあ、こんなに部屋の真ん中に堂々といわれたんじゃない、見ないわけにもいかないじゃないですか。それで、声をかけたりとかもしてみました。でも、何作ってるの？って聞いても、彼女、何も言わないんです。たまにこっちを見ることはあるけど、本当に喋らないんですよ。だからまあ、もういいかって」

茉莉、しばらくまつりが作っているものをぼんやり眺めてから立ち上がり、カバンの中のものを出したり水を飲んだりする。カバンの中から潰れたコンビニおにぎりを取り出し、かじる。茉莉、スマホを横にして動画を見始める。

玄関チャイム。

茉莉、玄関へ。

まつり、製作の手を止めて玄関の方を見つめる。

茉莉の声「え？　どうしたの？」

酒井の声「ほんとごめん、ちょっと今夜泊めてくれない？」

茉莉の声「え、まあいいけど…酔ってるよね？」

酒井の声「うん、ちよつとこの近くで飲んでたんだけど、上司にすげー連れ回されちゃってさ」

スーツ姿で酒に酔った様子の酒井翔太(27)と茉莉、話しながら登場。

酒井「終電無くなっちゃったんだよね」

茉莉「最近飲み会多すぎじゃない？」

酒井「毎週だよ」

茉莉「大変だね」

酒井、ため息をつきながらまつりが座っている椅子に座ろうとする。

まつり、飛び退いて席を譲る。

茉莉、その様子を見て一瞬動きが止まる。

酒井「ごめんね、突然」

茉莉「え、いや、いいよ別に」

まつり、酒井をしばらく見つめた後、退場。

酒井、まつりが縫い合わせていた布が見えないかのように、その上に肘をつく。

茉莉、酒井に今まで自分が飲んでいたペットボトルの水を差し出す。

酒井「サンキュー」

翔太、水を飲み、机の上に何もないかのようにペットボトルを置く。

茉莉、その光景から目を逸らす。

茉莉「シャワー浴びる？」

酒井「ん：いや、まあそうだな」

酒井、眠そうに机に突っ伏す。

茉莉「そこで寝ないでね」

酒井「うん：、シャワー明日にしようかな」

茉莉「え。シャワーしないならベッド入らないでよ」

酒井「ええー、茉莉、昔からそういう潔癖なところあったよな」

茉莉「潔癖じゃないから。普通に汚いでしょ」

酒井「汚いて：」

茉莉「翔太入らないなら私先入るから」

酒井「え？ まだなの？」

茉莉「今帰ったとこだもん」

酒井「おそ！ ブラックじゃねーの、その会社」

茉莉「しかたないでしょ、シヨップが10時までなんだから」

酒井「そんな時間まで誰が服買うんだよ」

茉莉「仕事終わりのOLさんとか」

酒井「ふうん」

茉莉「はい、早く入っちゃってよ。私明日朝番なんだから」

酒井「え！ ラスト入った次の日朝なの！ マジでブラックじゃん」

茉莉「翔太のそこそブラックでしょ。毎週末こんなになるまで飲み歩かされて」

酒井「はは」

茉莉、散らかった洗濯物の中からバスタオルを引っ張り出す。

酒井「：すごいね（洗濯物の山を見て）」

茉莉「うるさい」

酒井「ねえ、明日ここにいていい？」

茉莉「え？ 私仕事だけど」

酒井「うん。待ってるからさ、晩飯でも行こうよ。何時上がり？」

茉莉「6時だけど…でもたぶん残業になるから」

酒井「いいよ。そのイタリアン行こうよ。行ってみたいって言ってたでしょ？」

茉莉「…別にいいけど」

酒井「うん」

茉莉「うん」

茉莉、酒井にもタオルを渡す。

茉莉「はい」

酒井「え？」

茉莉「タオル」

酒井「あ、サンキュー」

茉莉「先入っていいよ」

酒井「一緒に入る？」

茉莉「…いい。今日汗かいたから」

酒井「そっか。俺も酒臭いしな」

茉莉「うん、臭いよ」

酒井「なんだよ」

茉莉、酒井、顔を見合わせてクスッと笑う。

酒井「いいじゃん。二人とも臭いんだし」

茉莉「…じゃあ先行ってて」

酒井「おう」

酒井、タオルを持って退場。

茉莉、酒井を見送って小さいため息。まつりが縫っていた布を見る。洗濯物の中から自分用のタオルを取り出し、部屋の電気のスイッチを消す茉莉。パチっという音。

暗転。

## ②美術室(夕)

薄暗い教室。

黙々と絵を描いているまつりと工藤真由(17)。

倉田京香(17)、登場。部屋の電気のスイッチを点ける。パチっという音。

明転。

まつり「あっ」

真由「京香！」

京香「暗い！」

まつり「あ、ありがと」

京香「ありがと、じゃないよ。日が落ちてんのも気づかないってどんだけよ」

まつり「えへへ」

真由「そういえば暗かったね」

京香「熱中しすぎ」

まつり「京香、今日休みじゃなかったんだ」

京香、スクールバッグからパックのジュースを取り出して飲む。

京香「休むつもりじゃなかったんだけどさ、たけっちと喋ってたらかんな時間になっちゃった」

まつり・真由「ふーん」

京香「何よ！　しょうがないじゃん」

まつり・語り「美術部、私たち3人だけなんです。一応他にも部員いるんですけど、皆幽霊で。しかも顧問もほとんど来ないから、勝手に自由に好きなもの作ってます。基本、私は服のデザイン。真由は、この中では一番芸術家肌っていうか、可愛いものの好きなんですけど、ちょっと思いつかないような不思議な絵を描いたりしてます。それから京香は、最近部活には来たり来なか



ったり。彼氏ができてから浮かれてそっちに夢中なんです。美術部ってこと以外にそんなに共通点とかないんですけど、多分私たち、卒業してもずっと友達なんじゃないかなってくらい、本当に気が合って、とにかく仲良しなんです」

真由「ねえ、いつもたけっちと何話してんの？」

京香「え？ いや別に普通だよ。皆と話してる内容と変わんないかな」

真由「うそ〜！」

京香「いや、意外と普通だよ。明日の小テストだるいとか、今度コンビニの新作のラテ一緒に飲もうよとか、夏休みまだかなあとかね」

まつり「普通だね」

真由「ええ〜、いいなあ」

京香「そう？」

真由「私、男子と何話していいか分かんないんだもん」

京香「別に男子だからって話題変える必要ないでしょ」

真由「だって、男子に流行りのメイクの話とか、欲しいサンダルの話しても盛り上がらないでしょ」

まつり「真由はザ・女の子って感じだからなあ」

京香「真由彼氏いたことなかったっけ？ 中学とかでも」

真由「ないない。なんか緊張しちゃうんだよね、男子と話すの。男友達もいないよ」

京香「たしかにいつも女子のグループにいるよね」

真由「京香、たけっちと付き合って今でどのくらい？」

京香「ふふ。実は、明日でちょうど5ヶ月なんだよね」

真由「おお！ 結構続いてるよね！」

京香「まあね」

まつり「武村のどこがいいのよ」

京香「まつりにはわかんないのよ、あの色気が」

まつり「色気!? 汗臭いだけでしょ」

京香「ちよっと、やめてよね！ 酒井の方が汗臭いでしょ、サッカー部だし」

まつり「なんで酒井が出て来るのよ」

真由「だって、まつりもう酒井ちゃんと付き合って長いんじゃないの？」

まつり「え？ いや、付き合ってないから」

真由「あれ？ そうなの？ でも一緒に帰ったりしてるじゃん」

まつり「それはたまたま部活終わりの時間とか帰る方向が一緒なだけ」

京香「まつりはおこちゃまだからね。まだ早いよ」

まつり「うるさい！ だいたい、私今そんなことしてる時間ないから」

真由「文化祭の展示？」

まつり「うん」

京香「そんなの、さっと終わらせなよ。青春は部活だけじゃないよ」

まつり「さっと終わらせられないよ。これのために毎日学校来てると言っても過言じゃないんだから」

真由「まつりは真面目だからね」

京香「そうか？」

真由「え？」

京香「だって、授業中めっちゃ寝てるよ？」

真由「そうなの？」

まつり「いや、そんなに寝てないって」

京香「いやいや、私の方がまだ起きてるって。今日も一時間目から船漕いでたじゃん」

まつり「あれは！ だって川野先生の声眠くなるんだもん。しかも数学嫌いだし」

京香「いやいや、数学だけじゃないよ！ 毎日何かしらの授業で寝てるから」

真由「ええ！ 意外！」

まつり「ちよっと、余計なこと言わないでよ」

真由「なんでそんな眠いの？」

京香「どうせ夜中までデザインしてんでしょ」

まつり「…だってなかなかディテールが決まらないんだもん。今週中にデザインまで終わらせて、来週から製作入りたいのに」

真由「夜中までやってるの？」

まつり「うん…」

京香「ね？」

真由「部活だけめっちゃ真面目ってことか」

京香「部活っていうか、自分の好きなことだけね」

まつり「いや、普通に生活態度とかも真面目だから！ 京香よりは」

京香「はあ？」

真由「やめなよ(笑って)」

まつり「っていうか、京香全然展示の準備してくない？ 文化祭どうすんの？」

京香「ああー、今年はまあ、いいかなと思ってる」

真由「え、いいかなって、出さないの？」

京香「うん、まあそうだね」

まつり「もったいない！ 一年に一回の皆に作品見てもらえる日なのに」

京香「うーん、ま、そうなんだけど。でも毎年そんな人入らないじゃん？」

まつり「まあそうだけど…」

真由「でも私は出すよ！」

京香「何にすんの？」

真由「私はこれ作ってるの」

京香「…なんなの、それ？」

真由「わかんない？ 色んな動物の体の模様を一つのキャンバスに表現してる」

京香「…：へえ」

真由「可愛い？」

京香「…かわいい」

まつり「私それ見てて思ったんだけど、なんかポーチとかハンカチとか、持ち歩くものの柄だったら可愛いかも。キャンバス全面それだとぱっと見何か分りにくいけどさ」

真由「ああ、そうかもね！ 作ってみようかな」

まつり「うん、まだ時間あるしやってみたら？」

真由「じゃあ、まつりが作ってる服にこの柄をプリントして、共作ってことにしない!？」

まつり「…えっと、それはまた今度にしようか。これは柄とかそういう感じじゃないからさ」

真由「ええ、そう？」

まつり「うん、ごめん」

京香「まつりはまた服なの？」

まつり「うん！ 去年よりめっちゃ豪華にしたいの。チュールとサテンメインで」

京香「布どうすんの？」

まつり「お小遣いでなんとかなる範囲で」

京香「ふーん」

真由「ほんと好きだよね、服」

まつり「うん。ちっちゃい頃からデザイナーになりたかったから」

京香「そうなの？」

まつり「うん。デザイナーになって、パリコレに私の作った服が登場するのがずっと夢だったの」

真由「すごいね」

京香「今も？」

まつり「いや、今は…でも、パリコレとかはもうさすがに思っていないけど、デザイナーにはなりたいたいと思ってるよ」

真由「そうなんだ」

京香「なれるんじゃない？ 普通に」

まつり「え？」

京香「だってまつり、すごくない？ そのなんていうか…アイデア？ いっぱい描き溜めてるでしょ」

真由「あ、そうだよ。いつも持ってるスケッチブックにさ」

まつり「あれは…落書きだよ。皆どっかで見たことあるような服ばかり。もっと独創性とかないと」

京香「そうなの？ すごいと思うけどな」

まつり「いや…」

まつり、デッサンに戻る。

真由、京香、顔を見合わせる。

真由「あ、そうだ。来月の花火大会、3人で一緒に行かない？」

まつり「ああ、もう来月か」

真由「うん。去年中止だったでしょ、台風で」

まつり「そういえばそうだね」

真由「だから今年は見たいんだよね、花火」

まつり「うん、いいよ。私も見たい」

真由「だよね！ 京香も行くでしょ？」

京香「あー、多分私無理かな」

真由「え？ なんで？」

まつり「分かった。武村と行くんでしょ」

真由「えー、そういうこと？ 友情より恋を取るんだ」

京香「いや、違うの。ほんとは行きたかったんだけどさ」

まつり「何かあるの？」

京香「その週一週間、塾の夏期講習なんだよね」

まつり「え？」

真由「塾行ってたの？」

京香「うん」

まつり「夏期講習って言ったって、花火夜だよ？ 8時とかからだよね？」

真由「たぶん」

京香「合宿なの」

まつり・真由「ええ!？」

真由「勉強合宿ってこと？」

京香「そう」

まつり「なんで？ まだ2年なのに」

京香「そうなんだけどさ、この前のテストの結果見て親が塾行けって言い出して、春から通い出したんだよね」

まつり「ええ…、知らなかった」